

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 高谷紀夫

高谷紀夫氏の博士学位請求論文「ビルマとシャンの民族表象と文化動態に関する人類学的研究」は、ビルマ（ミャンマー）国内で最大の少数民族であるシャン人の民族としての表象のされ方を、多数派民族たるビルマ人との相互的關係、またビルマ国家との關係に焦点を当てて論じている。筆者の過去 30 年以上にわたるフィールドワーク、現地資料と二次文献の渉獵、シャン人民族文化団体との接触から生み出された浩瀚な研究である。論文の構成は、ビルマにおける民族論的状况を先行研究の批判的検討と共に概観した序章に続き、仏教儀礼からビルマ文化・シャン文化を論じた第Ⅰ部、ビルマとシャンの民族間關係を論じた第Ⅱ部、ビルマ人によるシャンの表象をあつかう第Ⅲ部、多民族国家ビルマの民族政策を取り上げた第Ⅳ部、シャン人自身によるシャンの表象を論じた第Ⅴ部、そして結論に分かれ、全 16 章に渡ってさまざまな角度から問題が考察されている。

第二次大戦後これまで、ビルマの少数民族を現地での長期フィールドワークによって研究した業績は、国際的に例が多くない。これまで各地で続いた中央政府に対する政治闘争・武装闘争、中央政府から調査許可を得ることの困難などが、その理由であった。人口規模が大きく、反政府武装闘争が相対的に小規模だったシャン人についても、これは例外ではない。本論文はこうした空白を埋める貴重な労作であり、ビルマ研究、文化人類学研究の分野で国際的な貢献となるものである。筆者は、特定のシャン人コミュニティで長期定住調査を行う機会を得られなかった。だが、長年にわたりシャン州各地を訪ねての調査の反復に、マンダレーなどの都市部および国外のタイや雲南でのシャン人（タイ人）コミュニティの調査を合わせ、これまで他がなしえなかったシャン人の今日についての民族誌を本論文で完成させた。このことの意義は大きなものがある。シャン人文化団体の資料を収集し活用していることも、本論文に独自の価値を与えている。

文化人類学上の民族論に対し、本論文には二つの新たな貢献が認められる。第一は、シャン人の民族表象をビルマ人とシャン人の相互関係、国家の政策との関係から描き分析したことである。第二は、特定のシャン人コミュニティの集中的研究に代えて、多数の場所ないし地域を横に連ねた調査法、記述法をとっていることである。この二点は、提案としてはすでに古くから主張されているが、実践に移され著述として完成した例は、日本国内ではまだ多くない。本論文の完成は今後の同種の試みへの大きな刺激となろう。多民族国家の少数民族は多数派民族側からの言説によって表象化される一方、自らは、自己の文化を民族意識の基盤として築く過程で、多数派＝国家のポリティクスを認識しながら、自らの民族表象の多数派に対する同質化と差異化を図る。こうした集団表象の政治性について、本論文は的確な整理を行うのみならず、複数の場所の民族誌としてシャンとビルマを提示することに成功している。

ビルマ研究により即した領域では、第Ⅱ部における、「シャンのビルマ化」「シャンのシャン化」が同時に進行しているという動態分析が重要なものである。これは、少数民族が、一方で、多数派言説が優越する脈絡に於いて周縁的に表象され、他方で、その制約の中で独自の自己表象を構築してきた、ということである。「シャンのビルマ化」は、シャン人がビルマ人に包摂同化されることではなく、少数派という位置づけを受容したままでの同化の過程である。また「シャンのシャン化」は、付与された少数民族としての位置づけを肯定的なものに転倒させる営みである。言語系統や生活様式から言えば、シャンは隣国タイの主要民族であるタイ人ときわめて近いし、ラオスや中国雲南省にも多くのタイ系民族が居住する。そうした中でも、主流文化への同化と少数民族としての独自化が、ビルマという国民国家の枠内で同時進行しているという指摘は注目に値する。

特定のコミュニティ内に長期に滞在したり、住民の住居に暮らすといった文化人類学のフィールドワークで常套的な方法が、法的・政治的制約から不可能だったシャン地域において、年月をかけて、国際的にも第二次大戦後はじめてというべきモノグラフを完成した意義は大きく評価されるものである。そうした方法的制約がシャン内部におけるシャン意識の多様性や対立を見えにくくしている点は、本論文の弱点と言えよう。だが、長期の研究の空白を埋めるパイオニア的業績として、本論文の持つ価値は明らかである。

したがって本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。